

# 「ことば」のパワー

高松 正毅



「学生のボキャブ危機的」私大生の19%中学生、「授業成り立たぬ心配」(独立行政法人メディア教育開発センターの調査による)とするシヨツキングな新聞記事(2005年6月8日付毎日新聞)が出た。この調査結果は、母集団の取り方等に問題があり、内容そのものは鵜呑みにすべきものではない。しかし、この記事中に注目すべき記述が見える。それは、「読む・書く・話す」というゆる『日本語力』は、語彙の豊富さから類推できる」とする一節である。

どうして総合的な能力であるはずの「日本語力」が、

「語彙」の豊富さだけから判断可能なのであらうか。

しかし「ことば」の機能は、情報の「伝達」にはとどまらない。他に、時候の挨拶など、具体的な意味内容をさほど持たない「社交」機能や、独り言や叫声など、半ば無意識的な「表出・調整」機能もある。

そして「思考」機能。人は「ことば」を用いて考える。映像や旋律などで考えることもあるが、抽象的な概念の操作は「ことば」なしには成り立ち得ない。

## 2 知っていることは、「語」を知っていること！

ここでわざりに問題としたいのは、「ことば」の持つ「認識」機能である。

知っているとは、物体が見えていることではない。何かがそこにあると認知できたとしても、それが何であるかを確実に識別できなければ、分かることにはならない。知っているとは、その物事を「ことば」によって切り取れること。つまり「語」を知っていることだ。

## 3 「対立」による「弁別」――言語学的思考法――

今が「幸せ」と言えるのは、「幸せ」という「語」を知っているからである。そしてさりとて、ここが極めて重要なのが、その状態が「幸せ」と分かるのは、「不幸せ」を知っているからである。常に「幸せ」だと、それは日常かつ当然の「常態」になってしまい、「幸せ」という概念は無意味化し、語そのものの存在意義が消えてしまつ。

言語学では、対(ミニマルペア)をつくり、その差異に注目し、その特徴(素性)に「対立」を見出し、二つが「弁別」できるとする。すなわち言語学では、ある人を美人やイケメンだと認識できるのは、美人やイケメンではない人がいるからだと考えるのである。

さらに言うなら、美人やイケメンの方が少ないために「希少性」が生じる。そうなると皆がそこに向かって集中するインセンティブが生じ、「価値」が高まる。この「希少性」以下は経済学の考え方だ。

以上のような物事をとらえるモデルを形成獲得するが、君たちが大学で學問を学ぶ意義である。

## 4 「ことば」、それが君の世界だ！

『我語りて世界あり』という神林長平の小説がある。題名は、もちろんデカルトの「我思る、ゆえに我あり」をもじったものだ。「我語りて世界あり」とは、語った分だけ世界が存在する、ということである。「ことば」によって語り得る範囲、それが「世界」である。

たとえば幼稚園児に「大きくなつたら何になりたい」と聞く。すると(幼稚園の)先生、おもちゃ屋さん、ケーキ屋さん、お花屋さんなどなど、さまざまな夢のある答えが返ってくるであろう。しかし、その答えには税理士や公認会計士といったものは決して表れない。これは自分の認識世界か

## 5 読んでみよう

- 橋爪大三郎  
『はじめての構造主義』
- 加賀野井秀一  
『20世紀言語学入門 現代思想の原点』
- 講談社現代新書

『我語りて世界あり』という神林長平の小説がある。題名は、もちろんデカルトの『我思る、ゆえに我あり』をもじったものだ。「我語りて世界あり」とは、語った分だけ世界が存在する、ということである。「ことば」によって語り得る範囲、それが「世界」である。

たとえば幼稚園児に「大きくなつたら何になりたい」と聞く。すると(幼稚園の)先生、おもちゃ屋さん、ケーキ屋さん、お花屋さんなどなど、さまざまな夢のある答えが返ってくるであろう。しかし、その答えには税理士や公認会計士といったものは決して表れない。これは自分の認識世界か

MASAKI TAKAMATSU

経済学部助教授。  
専門は国語学・言語学。「日本語概説」「日本語研究」「文章表現Ⅰ・Ⅱ」「論文作法Ⅰ・Ⅱ」を担当。  
「新選組」と「白虎隊」を愛する。  
尊敬する人物は「榎本武揚」「土方歳三」ら多数。嫌いなものは「薩摩と長州」。誓いの言葉は「臥薪嘗胆」。  
入場テーマ曲:「アイ・オブ・ザ・タイガー(サバイバー)」&「ターミネーターのテーマ」